

一本の欒の木

昭和六十四年九月蔵王に転居する為、自宅の棟上げを行った。前年小村崎に宅地を求めた。其処には平屋の古い家が建っていて、西側と北側には”イグネ”と言つて風除けの為、杉の木、欒（けやき）。等が三十本ばかり生えていた。

田舎は何処の家も”イグネ”で囲まれている。昔は殆ど茅葺きの屋根で強風に弱い、私の生家も妻の生家も、茅葺きで主に北側は杉の木が植えてあった。

小村崎は蔵王町で仙台に一番近い、宮城野の此処まで三十二キロ、ラッシュに遭わなければ四十五分で到着する。昭和三十五年に普通自動車を買ったが、少し遠い私の生家から三十分以内で来た事がある、車も少ないし信号も殆ど無い。

田舎道は全部砂利道だし、仙台には入っても長町に入るまで舗装道路では無かった。信号も殆



どない。砂利道を飛ばすとモーモーたる土煙が自動車を追いかける。到着すると車は真っ白に化粧している、それを毛刷毛で落とす、あの当時の車には鳥の羽で出来ている”ハタキ”を何時も誰もが積んでいた。

求めた小村崎の宅地は道路より六十センチ以上低く”イグネ”も邪魔だ。杉の木に混じって太い樗が生えている、義弟に手伝ってもらい総て切り倒した。妻が道路より低い屋敷は嫌だと言い出したので、土盛りする事にした。

樗の木から実が落ちて無数の新芽が生えていた。一〇センチから二〇センチ位、そのまま土を盛るのは忍びない。妻はその内から二本、リング畑の土手に思いを込め移植した。

杉の木は部落の人々が、風呂焚きにと全部持つて行ってくれ。樗の木は宅地の前の持ち主が欲しいと言われ進呈した。太くなっていたので記念にと思ったのだろう。

リング畑に移植した樗の木は生長が早い、妻が間隔を置かずに植えたので、枝ぶりのよい方を残し伐採した。あれから十四年、二〇センチ足らずの樗の木は、幹まわり三〇センチ、丈が一〇メートル位になり時々訪れる私達を、枝を大きく広げ迎えて呉れる。

平成十五年四月二十四日